

● 制作

我孫子市民文化キャンパス

～白樺派の精神を継ぐ新たな文化コロニーを育むランドスケープ

石井 彦弥

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム（主指導教員：武田 史朗）

ISHII Genya

1. 背景と目的

手賀沼に面する市の一つ、我孫子市ではかつて台地から眺める手賀沼の景色を求めて、明治 29 年の常磐線開通を契機に様々な文化人たちが別荘や邸宅を構えた。東京から約 1 時間の場所にある、都心の情勢をほどよい距離感から俯瞰しつつ、日常的に手賀沼の風景に親しみながら創作に打ち込める場所として注目を集め、文化空間「我孫子・白樺派」と称される文化コロニーを成していた¹⁾。その手賀沼の自然と白樺派という 2 つの側面に注目し、ランドスケープにおける環境資源と文化資源の活用を試みる。

2. 調査・分析：「我孫子にとっての白樺派」の変遷

文化空間「我孫子・白樺派」を先導していたのは、日本近代文学の一派の白樺派である。白樺派は同人雑誌「白樺」を 1910～1923 年に渡って刊行し、そこでは文学のみならず、美術、音楽、演劇、哲学など、多様な活動がなされた。そこで共有されていたのは、何にも依らない自分だけの個性を伸ばしていこうという主張である。西洋文化を真似るのではなく吸収し、自らの個性でもって自分たちの文化を育み、成長していこうとする姿勢は、国や家の制度に従うのが当たり前の時代に大きな影響を与え、その理念に共感した人々が分野を超えて集合体をなし、文化コロニーを形成していた²⁾。

やがて近代化が進むと、彼らが提唱した、自らが表現主体であり、個性を尊重すべきという考えは一般に定着し、普遍性を持ち出した。デモクラシーの動きも高まり、先んじて個性を重要視した「我孫子・白樺派」の役割も終わっていった。さらに時代の流れと共に手賀沼流域の市街化が進み、水害対策や食糧難のための開発が行われた。手賀沼は半分以上縮小し、減少した水量は人口増加に伴う生活排水を受け止めきれず、水質は悪化していった。さらに宅地が増えたことで、台地からの眺めも失われていった³⁾。

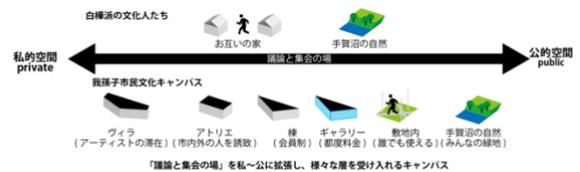
こうして「我孫子・白樺派」の文化コロニーは過去のものとなり、その遺構は人々が思いを馳せる場所となっている。そこで提案として、旧武者小路実篤邸から志賀直哉邸跡まで連なる手賀沼沿い一体を対象とし、静かに佇んでいる白樺派の遺構を巻き込みながら新しい文化が芽吹いていくような空間を提案する。

3. 方法

「我孫子・白樺派」の終焉と共に近代化がもたらしたのは、快適なアクセス、個性の尊重、広大な住宅地である。結果として現実にあるのは、寝に帰るだけでアイデンティティなく住む人々や、多様性といいつつ出る杭は打たれる均質化された社会、そして自然の消失である。白樺派が先導した「個性の発揮」は一度は一般化した考えになったが、現代は、本当の意味で個性的とは？という問いが見直されている時代であると考えられる。そこで本制作では、「我孫子・白樺派」の精神を継ぎ、現代ならではの多様化した価値観の人々が個性を掴もうとしながら生き生きと活動し、その中で自然との暮らしに回帰できるような、人々が愛着を持って暮らせるための新しい文化コロニーを育む空間を提案する。

4. プログラム

白樺派の文化人達は、お互いの家を行き来したり、我孫子に立ち寄る知人を自分の家に招いたり、舟から呼びかけたり、時には山菜やシジミをとったりしながら活動していた。書斎や別荘などの規定された空間に加え、広大な自然の中でも自由に議論と集会の場を発見していた。そのように空間全体が創造の場である暮らしをキャンパスと捉え、活動ジャンルごとの棟、それに対応するギャラリーを配置し、規定されたそれぞれのテリトリーはありつつも、その活動が外に及ぼうとするときも、手賀沼とその自然が活動の場になり得る市民大学的プログラムを編成する。



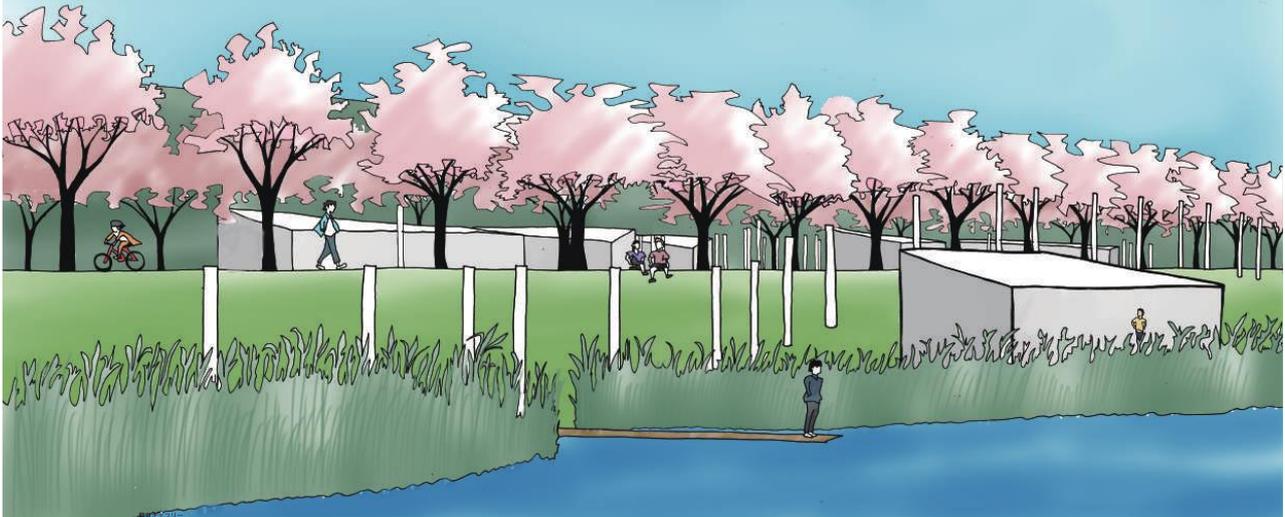
図：我孫子市民文化キャンパスの構想

参考文献

- 1) 山本 敏太郎. 白樺派の文人たちと手賀沼. 崙書房出版, 2011
- 2) 京都文化博物館, 宇都宮美術館, ひろしま美術館, 神奈川県立近代美術館, 読売新聞大阪本社文化事業部編. 『白樺』誕生 100 年 白樺派の愛した美術. 読売新聞大阪本社, 2009
- 3) 清水康次. 白樺派の研究. 大阪大学出版会, 2023

我孫子市民文化キャンパス

～白樺派の精神を継ぐ新たな文化コロニーを育むランドスケープ～



■ キャンパスの3つの理念

- ① **主体的な学び**
自らもやるべき主体的な学び
- ② **個性の発揮**
個性が創作する人となりと、仕事の仕方や理想の生活においては変化の可能性を持っている。それを求め、理想の生活・充実した暮らしを実現し、「理想」の創り手が、今更には必要になり、カンパは自身演習が建築「白樺」を通して伝えたいように、キャンパスそれ自体が外部に発信している。
- ③ **日常の美**
手賀沼とそれに呼応する空の広がりや風景とした我孫子の空間は、そこが人の感情に訴えかけられるものがある。そういった空気に気づいてもう一つ付け加えて、我々の両方環境的に人の活動に目的の風景や様々な用途の場があり、それぞれの立ち回れる場所から新たな発見がある。それらが自分の住むまちへの愛着や創作のインスピレーションに繋がれるキャンパス。

■ キャンパスの3つの軸

- ① **縦の軸：フェーズの移行・フェーズ間の触れ合い**
従来の大学キャンパスには出づる専門性の高い学生や教員に加え、様々なフェーズの人々にも開かれていく。段階的に増加するフェーズの触れ合いや、これらのフェーズをいつでも移行する可能性を持つ。
- ② **横の軸：ジャンルの融合、興味領域の広がり**
ジャンルごとのテリトリーが、同じ手賀沼の風景を共有し、連帯感を育む。適切な距離感を築きつつ、ジャンルの垣根や区別の共有を可能にする。
- ③ **斜めの軸：多世代の参加、世代を越えることの変化**
何も知らずに降り住んだ子供世代、子育てのために来た親世代、歴史を深く知る老後世代がそれぞれ異なる関心のきっかけを発見でき、子供から大人になるまで過ごすことで空間への感情の変化を体験し、認知を育む。

